

満州佐伯村遭難記 (三)

北山直之

(会員 佐伯市中の島一の九の二五)

土匪に囲まれる

翌十月十三日、学校の周りを千余の土匪(暴徒)に囲まれ、異様な殺気を感じさせられる。会議が何度も持たれ、若者たちは「どうせ駄目なら、老人婦女子を自分たちの手で始末して、最期を遂げよう」と主張したが、その都度、森脇辦市校長を始め年配の人達がなだめて事なきを得たのである。

※北山氏は第二集団(国民学校)にいた。第一集団(団本部)であわや婦女子の処分を始めようとする直前、国府側の公安隊が来援、手槍を持った団員と共に戦闘となり、相手に五〇数名の死傷者を出させ撃退、かろうじて危機は去った。

もし若者の主張を受け入れられていたら、どのような

結末となったのであろうか。今思うと、まことにぞつとするのである。

集団生活

いよいよ集団生活の始まりである。学校には四つの教室と教員室、別に教員宿舍一棟があった。

四〇〇人近い人を収容するには狭いので、校庭に大きな地下壕を作り、ここに避難してきた広陵開拓団(広島県)の人達を収容した。夜はかなり冷え込むので、教室の真ん中に炉を作った。床は板敷きなので、藁や枯れ草を並べその上にアンペラを敷いた。炉では黍柄や枯れ草を燃やして暖を採り、寝るときは不足気味の布団をみんなを着て、肌の温もりで眠りについた。食事はコーリアンのお握りを一個ずつ一日二食きり、おかずはノビルのみそ汁、それもだんだんみそも少なくなり、しまいには塩汁にノビルの浮いただけのものとなる。しばらくすると主食のコーリアンが不足するようになった。

本来なら畑は満人に貸しているので小作料として入る筈のところ、立場が逆転して全く手に入らない。相談の結果、小作人の家に向きのよい人を五・六人選び交渉に

行くこととし、わたしもその一人に選ばれた。当たって砕けるである。ところがこれが大成功であった。さつそくコーリヤン一石とか、スーガイ（燃料用黍柄）一〇〇束など、気前よく提供してくれたのである。翌日は婦女子にリュックサックを背負わせ、他のものはスーガイをかつぐ長蛇の列ができたのである。当分はこの方法で何とかしのいだ。

この頃国府軍と八路軍の小競り合いがしょっちゅうあったが、いつの間にか国府軍はいなくなり、八路軍の支配下に入った。八路軍は私たちの生命財産は保障すると約し、食糧を確保してくれた。物乞いは不要となりこれで一息ついたのである。

### 民主体制へ

三月に入り中共の思想工作員が入団、旧団の組織はすべて解体し、旧幹部を全員追放したのである。そして三十歳未満、十五歳以上の人の投票により、新幹部を選出したのである。

屯長には三浦一、八路軍との連絡役に春山藤男、水稻生産委員長に北山直之が当たることとなる。

私の仕事は稲作再開のため、先ず幹線水路の状況を点検することだった。山口、最上の人達と共に水門の調査に行った。ところが何者かの手によって堰堤は爆破され、使用不能の状態になっていた。修復のためには大量のセメントおよび骨材が必要である。通水まで後四〇日しか残されていない。修復は無理ということになった。このため田地を急ぎ畑に転用する必要に迫られた。

### 八路軍に徴用される

四月に入り国府軍と八路軍の戦いが激化し、八路軍支配下の団に、要員の徴用を命令して来た。これは大変なことでも人選に苦しみ、ついに抽選によることとした。人数はよく覚えていないが、出発に当たり機を見て逃亡するように指示した。

すると三・四日して全員帰って来た。ほっとしていると、また出せと言つて来る。不思議なことに追跡はしないのである。このようなことを何度か繰り返すうち、今度は看護要員として女性二〇名を出せと命令して来た。

人選に困つたが、これも抽選で出てもらった。男性はすべて帰って来たが、女性はついに引き揚げまで帰らなかつた。

## 脱出指示の密使入来

五月二十日の夕刻、昌図の日本人居留民団より密使が入団、「国民政府の方針により、日本人難民の送還が始まり、昌図県下の難民は五月末日までに乗船地（コ口島）に移動せよ。このため少なくとも二十五日までに、現地を脱し、昌図駅に集結せよ」というのである。

真偽を確かめるため、二十四日、団長は稗田甚三と私を連れ、山口、最上の開拓団を訪ねた。山口は概に脱出しており、最上も明日出発すると告げた。

これにより団長は、二十六日の現地離脱を決めた。

※このとき開拓地は共産軍の支配下にあり、最上を離れるとその先から昌図一帯は、国府軍の勢力下にあった。

## 共産軍の脅迫

予定していた二十六日・二十七日は雨となり、出発は延期された。その二十七日の午後のことである。突然共産側の工作員が現れ、団長矢野武吉、経理指導員出納研、農事指導員守永茂平、同じく金田豊、国民学校長森脇辦市、新執行部屯長三浦一、連絡員春山藤男、水稲生産委

員北山直之の八名が、本部からかなり離れた一軒家に呼び出された。

彼らは「引き揚げを中止し、中共の命に従い農業経営を続行せよ」と強要したが、われわれ全員の決意は堅く、翻意の意志の無いことを表明した。三時間にもわたり脅迫まがいの説得が続いたが、全員頑として承諾の回答を与えなかった。

やがて彼らは説得を断念した。そして突然□□指導員を連行すると言い出した。これはただ事でないと思い七人で必死の嘆願をしたが許されなかった。なんとなく不吉な予感がした。

学校に帰ると森脇校長が「満人に明日大車（荷馬車）二台を頼んであるが、来るかのう……」と言った。私は「それなら私が満人部落に泊まって一緒に連れて来ましよう」と約し、翌朝、車二台を連れ学校に帰ったのである。

## 現地離脱

五月二十八日は晴天であった。午前六時に全員集合。団長が、入植地への決別の辞を述べる。嗚咽の音が聞かれる。

大車一〇台に老幼者・病人を乗せ行列は進む。壮年者は手槍を持ち警戒に当たたる。その途中で森脇校長より、最上の校長とうちの□□指導員の二人の訃報を聞く。ただただ冥福を祈るのみ。途中で日没となり、昌図城郊外に野宿、不安な一夜を送る。

五月二十九日、再び行動を起こし、一人の犠牲者もなく、午前十一時、昌図駅に着く。二十四・二十五の両日脱出の山口・最上の集団は、途中暴徒の襲撃を受け、略奪・暴行の被害を受けたそうである。後で知ったことだが、团长と親交のあった冬萬貫という人物が、暴徒のいる本道を避け、安全な間道に誘導して無事脱出させてくれたのだと言う。彼はいったん作り上げた人間の信頼関係を、最後まで破らなかつたのである。

#### 乗船地へ

明けて五月三十日、駅に集結した難民は四〇〇〇名、開拓団関係は二二〇〇名、佐伯村関係は五五五名、無蓋車一両当たり一〇〇名、六車両に分乗、二〇車両連結して南下を始めた。途中雨となり、びしょ濡れの中、寒さのため一人の老人が私の車内で死んだ。やむなくある鉄

橋から川に投じ水葬にした。ただ冥福を祈るしかなかった。六月三日、錦州に着き三日間滞在、六日コロ島に移り夕方乗船した。乗船前米軍のDDTを浴び、長い間同居していたシラミともお別れすることとなった。

#### 船中の悲劇

船はリバイティ船（上陸用舟艇）だった。満州の山河を後に六日出港、十日には佐世保に入港したが、市内にコレラが発生して上陸できず、やむなく博多港に回航した。ところが今度私たちの船で麻疹が発見され、上陸禁止となった。ここで九〇名余りの病児と付き添いが一足先に上陸し、博多伝染病病院に収容される。

私も長男泰生を付き添い上陸したが、残った人たちは停泊し船中で一カ月近くを送り、船中でまた何人かの死者が出た。私の次男と妻の父も死亡した。せつかく日本に帰りつつ、自国の土を踏むこともなく遺恨のうちに他界した。痛ましい限りである。

全員が上陸できたのは、七月八日のことであった。病院に収容されたもののうち、何と二三名もの子供が死亡したのである。

（終わり）